

# 「校歌」物語

白糠高校⑥ 地域の象徴 今も変わらず

1952年10月、白糠町内で映画会が開かれた。主催は白糠高生徒会。その2カ月後には、校歌完成記念と銘打った白糠高演劇発表会も開かれた。これらのイベントの収益と、町内からの寄付金が校歌制作の費用に充てられた。校歌は誕生の時から、地域全体の大歓迎を受けた。

長い歴史の中で、歌詞が少し変わったこともあった。1番の「かたみに肩をくみかはし」は「互いに肩をくみかわし」と意識して歌っていた時代があるし、2番の「磯を噛み噛む」の部分を「磯をかみかみ」と歌う録音も残っているという。現在は、江口榛一さんが書いた歌詞通りに戻っている。

「2番の『茶路の流れ』という歌詞が懐かしい」。そう話すのは、83年卒業の中野孝行さん(58)。箱根駅伝の強豪、帝京大(東京)駅伝部の監督だ。中野さん自身も箱根ランナー。国士館大(同)で1年から4年まで出場し、エース区間の2区も2度走った。「高校の学生証も、卒業アルバムも今も持っていますよ」と笑いながら見せてくれた。

山間部の茶路小中学校から白糠高に進んだ。中学の卒業生は7人。白糠高は1学年7学級だったが、陸上部は10人に満たなかった。以前はインターハイや国体の選手、大東文化大(東京)で箱根駅伝を走った小林雄二さん(74年卒業)らを輩出した名門だったが、指導者の異動で部活の勢いが変わるのが公立校の「宿命」だ。

中野さんも1年の時は現役ランナーの指導者がいたが、翌年その教諭が異動。卒業まで一人で練習した。「今思うと、学校や白糠陸協(陸上競技協会)の大人たちが協力してくれていた。若い頃は気づかないうちにいろんな人に支えられているんです」と振り返る。

現在の後輩へのメッセージももらった。

「同級生が少ない分、絆も深くなるはず。高校

3年間で、いろいろ経験してほしい、一つの

ことを突き詰め

るのもいい。その

深さが分かれば

人生は楽しい」――おわり――

(大倉玄嗣が担当しました)

オンライン取材で白糠高の卒業アルバムを見せる中野孝行さん。帝京大駅伝部を強豪に育てた名将だ



1982